

## 保育に絵本を取り入れることの意義を探求する ～読み手の保育者と子どもが絵本に触れることについて～

The Search for Significance of Introducing Picture Books in a Childcare Spot  
～About the Experience of Using Picture Books for Both Teachers and Children～

赤井 治美  
Akai, Harumi

キーワード：保育・絵本・読み聞かせ・触れ合い・保育者・学生・原体験・伝承

### 要 約

日本の絵本の歴史を築き上げてきた松居直氏は、乳幼児期に絵本（絵本の読み聞かせ）に触れることは、子どもの成長に重要であるとの意義を唱え教育的効果があると指摘している。また、絵本の必要性を保育の手引き書とされている幼稚園教育要領、保育所保育指針等でも示されたり多くの絵本作家も伝えたりしている。

そこで、今回、保育と絵本の読み聞かせの意義について考えてみることにした。保育者の現状として絵本の魅力、興味・関心度や絵本の読み聞かせの重要性についての捉え方には個人差があると感じる。また、学生についても絵本への興味・関心度や乳幼児期に絵本の読み聞かせに触れてきた経験にも個人差がある。絵本の読み聞かせがもたらす子どもへの影響や保育に絵本の読み聞かせを取り入れる意義を探り、絵本の読み聞かせの重要性を発信するために役立てる。

### はじめに

保育者は、日々の保育の中で絵本の読み聞かせを当たり前のように実践している。1年の保育日数を240日余と考えると3年保育においては700冊余の絵本と子ども達は触れることになる。この経験は子どもの豊かな心を育み、保育に絵本の読み聞かせを取り入れることは大切であると考えてはいるが意義や意識には個人差があるように感じる。また、保育者を目指す学生についても絵本に触れてきた経験や興味・関心度には個人差がある。

このような現状を理解し、保育実践経験者として、また、保育者養成に携わる者として「保育と絵本」の在り方、絵本の魅力を考察してみることにする。子どもや保育者（読み手）にとっての意義や子どもの育ちにどのように影響を及ぼしているのか事例から探り、保育に絵本の読み聞かせを取り入れることの意味や意義の理解を深め、絵本を保育に取り入れる保育

保育に絵本を取り入れることの意義を探求する  
～読み手の保育者と子どもが絵本に触れることについて～

者の在り方を探ったり絵本の魅力を確認したりする。

## 方 法

### 1 保育に欠かせない絵本の存在を探る

#### (1) 倉橋惣三「保育法」講義録から「おはなし」(絵本)の在り方を読み取る

倉橋惣三氏(1882年～1955年)は、日本の保育の礎を築き、「日本のフレーベル」「幼児教育の父」とも言われた人物である。

『倉橋惣三「保育法」講義録 保育の原点を探る(菊池ふじの監修 土屋とく編)』は、倉橋惣三氏が、東京女子師範学校で講義をされていた時の学生の記録(昭和9年4月～昭和10年3月に至る保育実習科における講義内容)をまとめたものである。次の記述は、その中の方案の根本になる「保育法」の講義録からの絵本の読み聞かせの意義に関する記述の抜粋である。

#### ① 「保育項目」の「談話」より

<Ⅱおはなし>

- ・「内容が教育的でありたいとは思いますが、さらに要素がある。子どもはいかなる心理で、お話に触れるのであろう。(中略)話は聞いていることによって、先生との親しみを楽しもうとする。これは「互いの話」のごとく、相互的には行われて来ないけれども、ことによると、互いの話の場合よりも深刻なる場合で、その関係が保たれる。(中略)話が主であることは勿論だが、話し手と聞き手との間にとり交わされる親しみとは、重大なことなのである。また、始終聞いている中に、いよいよ親しみが出てくる。家庭生活において、母からお話を聞くのと同様の感じが頭の中にある。(中略)故に話は手段であり、その先生の方が本体なのである。幼稚園における話の態度は、子どもの親しみの態度を満足させるようにすべし。(中略) 子どもは皆先生との親しみを喜んでいるのである。」<sup>1)</sup>
- ・「話をしてもらうことにおいて、現実の世界からしばし離れた世界においてもらえる愉快。我々大人も、小説、芝居、映画によって現実から離れば楽になるのである。(中略)目的、義務、意味のある現実には窮屈である。現実で忙しい者ほど、楽な世界を求めるものなのである。」<sup>1)</sup>
- ・「子どもにもこういった愉快があるのである。気楽な世界においてやるのが大切なのである。(中略) 子どもを現実から離してやるのが目的で話しているのではないが、子どもの求める気持ちの中に、気楽さを求める気がある。現実から離れた気楽さである。(中略)彼らは、先生が考えるような功利的、結果的の考えを持っていない。子どもの中には、先生との親しみを喜んでいるのである。その親しみの味わいの方法として「話」があるのである。」<sup>1)</sup>

- ・「子どもらが話を聞いているときは、受け身の生活ではない。発動・活動の生活である。座って行儀良くしているが、これは外部であり、内部生活においては非常な活動をしている。彼らは、聞いている楽しさではなく、人には話をしてもらって、自分がするよりも多く自分の心を動かす楽しさである。」<sup>1)</sup>

以上の記述から、「おはなし」を保育に取り入れる意義として、下線部のように1点目として、話そのものというよりも、話し手と聞き手との間の親しみが主になっていると示している。もう1点として、絵本や物語に親しみ、興味をもって聞き想像する楽しさを味わうこととして倉橋惣三氏は取り上げている。

下線文を絵本の魅力としても捉えることができ、現在も変わらない絵本の魅力、保育に取り入れる意義と一致する。

現在は、倉橋惣三氏の講義内容の他にも絵本文化、絵本の読み聞かせと子どもの育ちについて、実践的な研究成果が導き出され、言葉の発達を促すことは言うまでもないが絵本の重要性が様々な視点から述べられている。

90余年も前の時代の保育に「おはなし」を取り入れる意義を示していることに感動する。現在をそれぞれに生きる保育者達、また、未来を担う学生達、子ども達に素晴らしい「絵本の読み聞かせ」「絵本」の魅力及び保育（子育て）に必要であることを今やれること（絵本に親しむこと）を実践していくことが絵本文化の伝承していくことになると考える。

## （2）現行の幼稚園教育要領解説 第2章ねらい及び内容「言葉」より

平成29年3月31日に幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が同時に改定（改訂）され平成30年度から実施することになった。幼児教育については同じ教育内容となった。5領域「言葉」に示された絵本に関する内容を確認する。

- ・ねらい（3）日常生活に必要な言葉がわかるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。<sup>2)</sup>
- ・内容（9）絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう。<sup>2)</sup>

解説の中には、「言葉の楽しさや美しさに気づき言葉に対する感覚を養い、状況に応じ適切な言葉の表現を使うことができるようになる上でも重要である」<sup>2)</sup>と記されている。言葉の発達を促すことは勿論である。また、「幼児は、絵本や物語などの読み聞かせを通じて、幼児と教師の心の交流が図られ、読んでもらった絵本や物語に特別な親しみを感じるようになっていく」「また、幼児は、教師に読んでもらった絵本を好み、もう一度見たいと思い、一人で絵本を開いて、読んでもらったときのイメージを思い出したり、新たにイメージを広げたりする」<sup>2)</sup>とある。

## 2 学生が絵本の読み聞かせに触れ感じたことや幼少期の絵本との思い出を探る

絵本に関するアンケート（記憶に残る絵本及び理由を記述）を実施し、実態を把握する

- ・対象：令和3・4年度幼児教育学科1部、3部の学生 約70人
- ・回答によって学生に不利益を被るものではないことを説明し実施した。また、第三者

保育に絵本を取り入れることの意義を探求する  
～読み手の保育者と子どもが絵本に触れることについて～

に特定されないように配慮し作成した。

<学生の幼児期の絵本の思い出の記述の紹介>

○絵本名と理由を記述

- ・ぐるんぱのようちえん・・・母親によく寝る前に読んでもらって今もずっと好きだから。
- ・もったいないばあさん・・・二つ上の姉と一緒によく読んでいた。絵本はいつも姉のおさがりでした。残すと本当に来るのではないかとこわかった。
- ・はらぺこあおむし・・・保育園の先生が歌でお話をよく聞かせてくれたから。
- ・くりとぐら・・・大好きな先生によく読んでもらったから。
- ・つみきのいえ・・・私が生まれたときに親がつくってくれた絵本だから。
- ・おおきなき・・・よく親が寝る前に読んでくれたから。
- ・はくちょうのおうじ・・・母に寝る前によく読んでもらったから。
- ・いないいないばあ・・・母親にたくさん読んでもらった記憶があるから。
- ・ちょっとだけ・・・おばあちゃんにもらって家にあり何回も読んでいたから。
- ・ぐりとぐら・・・おかあさんと絵本を見ながら真似して（カステラを）作ったからです。
- ・どうぞのいす・・・初めて自分で「これがいい」と言って、買ってもらって毎日持ち歩いてきたから。
- ・からすのぱんやさん・・・好きでよく読んでいた。保育園でお遊戯会の劇でやったから。いろいろなパンが出てきて食べてみたいと思ったから。
- ・あかちゃんまんとながウリマン・・・アンパンマンの絵本です。  
小さい頃アンパンマンとあかちゃんまんが大好きでした。ながウリマンと別れる場面があるのですが別れを惜しむあかちゃんまんに共感し涙が止まりませんでした。その結末が悲しくてその絵本をしまっ  
てしま見るのをやめてしまいました。
- ・ノントンシリーズ・・・1歳ころからノントンが大好きで、1日に4回くらい同じものを  
読み聞かせて欲しいとねだっていたと母が言っていました。
- ・いのちをいただく・・・小学校の時、読み聞かせに来てくれた人が読んでくれ、「いただき  
ます」、「ごちそうさま」の意味が分かったから。
- ・ねずみくんシリーズ・・・自分は身長が小さかったので親近感がわいて好きだった。
- ・わたしのワンピース・・・真っ白なワンピースがお花やお星さまや色々な模様が変わって  
いく姿がかわいし変わっていくことにワクワクしたから。夢  
が膨らむような世界観が好きでした。
- ・ぐりとぐら・・・絵がカラフルで気に入っていた。  
何回も読んでいた記憶がある。
- ・はらぺこあおむし・・・絵がとてかわいから、よく読んでいたから、歌いながら読む  
のが好きでした。
- ・はなのあなのえほん・・・病院に行く度、持っていったりしていた。  
また、何回も読み返していた。

- ・バムとケロのにちようび・・・保育園の頃に絵本の絵が好きで何回も読んでいた。その頃は家にはなかったので高校2年生の時に買いました。
- ・もったいないおばけ・・・食べるときに残したら本当におばけが出てくると思っていたから。
- ・くれよんのくろくん・・・黒にも使い道があり、電飾できれいな花火ができて感動したから。
- ・はらぺこあおむし・・・穴が開いていて他にも仕掛けがあって面白かったから。  
穴に指を入れてよく遊んでいた。  
保育園の頃よく読んでいたから。
- ・ちょっとだけ・・・この本に出合った時が自分に妹ができた時でお姉ちゃんになったからお手伝いを頑張りたい、でもちょっとだけでいいからママに甘えたくなる主人公の女の子と自分が重なりあって女の子の気持ちがとてもよく分かったから。
- ・はじめてのおつかい・・・絵の雰囲気や同じ気持ちになりドキドキしながら読むことができるので小さい頃から気に入っていました。
- ・きれいなはこ・・・おばけがでてきてこわかった。  
絵が怖かったから表紙をみるのもこわかったからおもちゃ箱の中に隠していた。
- ・まあちゃんのながいかみ・・・あんなに長く髪を伸ばすことは難しいし大変だけど、長い長い髪でいたいことを語るまあちゃんを見ていると夢があってワクワクしたのを覚えています。

学生の幼少期の絵本の思い出アンケートにも記述があるように「先生に読んでもらった」「母親に読んでもらった」など身近な読み手である大人の存在と共に絵本の思い出は残っている。また、「よく読んでもらった」「何回も読んでもらった」等お気に入りの絵本となりお話に親しむ経験となっている。現実ではないイメージの世界を楽しむという内容の記述も多々あった。これらのことは、先に示した幼稚園教育要領解説の内容と重なる。絵本の読み聞かせをすることは、子どもの育ちを促していくものであるといえる。

また、読み手である保育者や母親等がその当時には、アンケートの内容の子どもの思いに気付かなかつたり分からなかつたりすることもあると感じた。読み聞かせ直後に絵本のお話が遊びとして表れたりイメージや言葉を楽しんだりもしていることは勿論のことである。その後、時は流れても子どもは、絵本の読み聞かせの情景を鮮明に思い出したり甦ったりするものであることが分かった。絵本に触れた経験は確かに蓄えられ豊かな思い出として甦ると学生の記述したエピソードからも確認できた。このことが豊かさとなると考える。

### 3 絵本の魅力を探る

#### ○絵本の読み聞かせ保育実践エピソードから

数年前保育実践に携わっていた頃、4歳児クラスで絵本の読み聞かせをした時の絵本の思い出を紹介する。



保育に絵本を取り入れることの意義を探求する  
～読み手の保育者と子どもが絵本に触れることについて～

<絵本名>

「あしたてんきになあれ」

作：荒川薫 絵：長新太 出版社：福音館書店

<背景>

・意図：10月下旬頃、子ども達は秋の遠足を楽しみにしているため、秋らしさもあり遠足を楽しみにする思いに共感しながらお話を楽しめるとの願いをもち、絵本の読み聞かせを実施した。

<子どもの姿と保育者の思い>

子ども達は静かに見聞き入り言葉もなかったため、どのような思いなんだろうと思いつながら進めた。読み終えると一人の男児が、「いいお話だったね」とボソッとつぶやき、その子に共感するかのように周りの数名がうんうんと頷く。筆者も思わず頷き「いいお話だったね」とうれしくなり受け止めた。

その日の降園時間後（午後4時半頃）にまたうれしい状況に遭遇した。4歳児の男児二人は、お迎えの母親の見守る中、ひとしきり追っかけっこをしたりジャングルジムに乗ったりして遊んだ後、ブランコに二人がそろって乗り、座ってこいで遊んでいた。筆者は、そんな様子も遠巻きに微笑ましく見守った。その後、筆者が用事でブランコの前を通る際、ブランコに乗る二人に「楽しそうに遊んでたね・・・」と声をかけおしゃべりをしていると西の空が徐々に夕焼け色に染まっていく。ますます赤色を増した見事な夕焼けに見とれ、暫く子ども達と一緒に西の空を眺めた。夕焼けを眺めながらというより真上の空まで赤く染まり夕焼けの世界に包み込まれ、子どもたちと一緒に世界にいるようなそんな感じに浸っていた。すると一人の男児が「きれいだね。本当にきれいだね」「絵本の夕焼けと一緒にだね」と美しさに感動したようで呟くように話し出す。筆者は、ますますこの美しい夕焼けと男児の言葉、情景に感動し嬉しさ、喜びでいっぱいになってきた。この心もちを『豊かさ・幸せな時』というのだろうと心が満たされていった。こうしている今も再び甦ってくる。また、この絵本を手にした時や夕焼けを見た時にこの感覚、情景が甦り、今でも心がほっこりする。

<読み取り>

- ・「あしたてんきになあれ」の絵本を読み聞かせをした日に、読み聞かせをした子ども達と絵本と一緒に夕焼けに浸れたことは、稀なことである。男児のその時の表情や言葉、情景から男児は、絵本の世界と現実の世界での出来事と同じような情景に遭遇し、再び絵本の世界に浸れたのではないか。また、絵本の夕焼けの場面や男児の現実と絵本の世界での出来ごとがぴったり合い、ますます『夕焼け』のイメージが豊かに描けるのではないか。
- ・このエピソードは、絵本のイメージの世界と現実の出来事が実感として味わえた1例であり、筆者が絵本と触れ合い豊かな・幸せな時間を実感した1例でもある。一人一人がそれぞれに絵本に触れ感じる幸せ感や豊かさは様々であると思う。だからこそ、たくさん絵本の読み聞かせをしたりしてもらったりすることで、豊かで、幸せを感じる機会がたくさんあるのではないかと考える。

○エピソードからの気付き

- ・元保育士でありその後、絵本作家として活躍する中村柁子氏の著書のなかには、保育士時代の絵本の読み聞かせの事例がたくさん記載され絵本のすばらしさを発信している。

絵本の魅力と共に子どもの喜びや楽しさがあふれている。その事例に刺激を受け、私もという思いや共感をしたりして、実践を積み重ねていけるようになる。絵本の魅力を実感したり保育に重要な役割を果たすことがわかったりして、子どもや保育者を成長させてもらえる書籍である。

よって、保育に積極的に絵本を取り入れ、子どもの姿、言動から子ども理解に努めること、絵本の読み聞かせが遊びや生活の中にどのように影響して表れているのか意識してみていくことが大切である。

また、絵本作家として活躍する中村榎子氏の著書や日本の絵本文化の礎を築いた松居直氏の著書を読んだり斎藤敦夫氏、瀧薫氏、絵本作家の角野栄子氏、降矢なな氏、小西英子氏等講演を聞いたり、かこさとし氏、せなけいこ氏、いわさきちひろ氏等の原画展を鑑賞したりしてきたことで、絵本のすばらしさや読み聞かせの在り方等を学ばせてもらえた。

## 結果及び考察

- 1 絵本を保育に取り入れる意義としては、その時間が楽しい、うれしい時間となることである。また、幼稚園教育要領解説等に示されているように、豊かな言葉の発達を促したりイメージを豊かにしたりすることは言うまでもない。

特に大切な点として、学生のアンケートからも分かるように、「母親が～、保育園の先生が～読んでくれた」と記述があるように、身近な大人（母親や保育者）と共に絵本の思い出がある。温かい人と触れ合い、心を通わせ豊かな時間になっており、心の安定、そして信頼感となっていく。人格形成の基礎作りの役を担うことになる。

- 2 保育者（学生）が絵本の楽しさや絵本の魅力が分かり絵本の読み聞かせを保育に取り入れていく意義を理解するために次の①～⑥が必要な手立てとして筆者の絵本経験からの学びも含めまとめた。

- ① 絵本が好きになることが基本にある。しかし、初めから好き、興味・関心があったということではなく絵本に触れる経験からその思いは芽生えてくる。よって、絵本には魅力がある、楽しいものであると信じて実践すること。

子どもにとって絵本の読み聞かせはうれしい、楽しい時間であり、楽しむ中で育まれていくものであると捉え、内容を理解させるため、役に立たせるために等の意識をしすぎないこと。

- ② 読み聞かせのその時、直後、その後と子どもの姿をしっかり捉えようと意識をすること。子ども理解が保育同様に大切。

- ③ 絵本好きな友達、先輩をもつこと

絵本の面白さ、楽しさ、具体的な保育実践に関する話を聞く機会になり刺激される。

- ④ 保育者（学生）の絵本の読み聞かせの経験には個人差があるが、今からのスタートしかない。絵本の読み聞かせをしてもらう（聞き手）経験、また自分が読み聞かせをす

保育に絵本を取り入れることの意義を探求する  
～読み手の保育者と子どもが絵本に触れることについて～

る（読み手）経験を積み重ねること。

- ⑤ 絵本の読み聞かせの意義や絵本の魅力を記述した書籍を読むこと。また、絵本に関する講演会、絵本の原画展等に出向くこと。

絵本の魅力をまた、絵本の深い読み取り等を教えてくれ、納得できる。

絵本作家の思いを聞くとその絵本や作者が理解でき親しみや関心度が高まる。

- ⑥ 本屋や図書館に出向くこと

たくさんの絵本に触れたり、絵本の紹介がしてあったりして、たくさんの絵本に触れる機会となる。また、図書館に来ている親子に触れ、絵本と関わる子どもの姿から学ぶことができる。

### 3 絵本の魅力を伝えるためには

- ① 知りうる知識や経験から絵本の楽しさや必要性を実践事例から語り伝えること。
- ② 保育に絵本を取り入れる意義が書かれた書物を読んだり絵本作家の講演を聞いたり絵本の原画展に出向いたりして、絵本に触れる経験を積み重ね絵本を見る目を養い続け深めること。
- ③ 学生一人一人が育ってきた環境、絵本に触れてきた環境が違い、また、興味や関心度も違う。そのことを理解し受け止め、一人一人の今に付き合い、変容をともに喜んで認めたりする。
- ④ 絵本の読み聞かせを実践したり絵本の魅力を発信したりすることは、絵本文化の継承となり絵本が読み継がれていくことになる。絵本が好きな人が増えれば、その人がまた実践、発信し広がっていく。学生自身も絵本の魅力、絵本の楽しさなどが実感できれば、学生自身も豊かな経験となり将来、積極的に絵本を保育に取り入れることに繋がる。

## おわりに

保育者として長年、保育に携わり絵本の読み聞かせの実践ができたことは、幸せな時間であったこと、たくさんの子ども達と触れ合い幸せな時をいただけたことに感謝の気持ちでいっぱいである。保育に絵本を取り入れることは、子どもの育ちを促す存在である保育者も子どもから学ばせてもらったり幸せ感を味わわせてもらったりと子どもと一緒に保育者も豊かに育つことができる素晴らしいことであると再確認できた。

今回、改めて松居直氏の著書を読み直し、「絵本の読み聞かせは、役に立つ、ためになるから教えこもうと教材として利用したりするものではない。1冊の絵本が子どもの成長にもたらす価値はその絵本によって子どもがどれほどの喜びを感じたか否かで決まる」<sup>3)</sup>「語る大人と聞く子どもと共に居て、人と人の絆を作り出すものである」<sup>3)</sup>という言葉が心に響いた。このことが、子どもも大人も豊かに育つことになると考える。今後も絵本の読み聞かせの実践を積み重ねていきたい。



### 引用文献

- 1) 菊池ふじの監修 土屋とく編 (1990). 保育の原点を探る 倉橋惣三「保育法」講義録
- 2) フレーベル館厚生労働省 (2018). 保育所保育指針解説 フレーベル館
- 3) 松居直 (2000). 絵本の森へ 日本ディタースクール出版部

### 参考文献

- 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説 フレーベル館
- 荒川薫作 長新太絵 (1990). あしたてんきになあれ 福音館書店
- 松居直 (1981). わたしの絵本論 国土社
- 松居直 (2007). 絵本のよろこび NHK出版
- 三神廣子 (2017). 本が好きな子に育つために 萌文書林
- 瀧薫 (2018). 保育と絵本 エイデル研究所
- 中村柊子 (1997). 絵本はともだち 福音館書店

### 付 記

保育者として長年、保育に携わり絵本の読み聞かせを実践ができた幸せと共に過ごした子ども達や保育者の皆様に感謝します。

また、絵本に関するアンケートに協力いただいた学生に感謝し、今後の活躍を期待しています。

